

オガサワラコツブムシ

Gnorimosphaeroma boninense

ワラジムシ目(等脚目)
コツブムシ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

体長最大 5.7mm。体は平たく、楕円形で体長は体幅の 1.9 倍。フタゲイソコツブムシ *G. hoestlandti* と最も類似するが、1) 第 1 胸肢腕節後縁の剛毛数が少ない、2) 第 1 触角の鞭節数が少ない、3) 腹肢の剛毛が少ない、4) 第 7 胸肢腕節に多くの剛毛を持つことなどで区別される。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

生息適地は激流部など限られた河川区域に点在し、個体数も限られている。小笠原諸島では近年降水量の減少に伴い河川流量が減少しており、本種の生息環境は不安定と考えられる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島の生息地のうち 2 地点はダムにより分断されている。これらの地点は 1999 ~ 2000 年の生息密度は高かったが 2006 年以降著しく減少し、そのうち 1 地点ではほぼ確認されない。水質悪化、外来魚による捕食も絶滅につながる危険要因となるが、特に乾燥化が致命的と考えられる。

【関連文献】

Nunomura, N. & K. Satake, 2006; 布村昇, 2010.

(執筆: 布村昇・佐竹潔)



オガサワラコテナガエビ

Palaemon ogasawaraensis

エビ目(十脚目)
テナガエビ科

小笠原諸島

VU

環境省

VU

【形態・生態】

体長最大 4cm ほど。体色は半透明で黒い筋がある。額角上縁の歯数は 7 ~ 12。歩脚の関節部は目立つオレンジ色。詳しい生態は不明であるが、河川によっては確認される年とされない年があることから、安定して生息している河川から幼生の海域への分散と他の河川の感潮域への新規加入が繰り返されていると考えられる。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

父島の河川感潮域の数地点に限定されるが、そのうち安定して生息が確認できるのは 2 地点のみである。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

基産地の河川では近年の記録がない。減少要因は、長期化する河口閉塞や河川感潮域の淡水化などである可能性が高い。また、農薬の流入には特に注意を払う必要がある。

【関連文献】

Kato, H. & M. Takeda, 1981; 佐竹潔・上野隆平, 2004.

(執筆: 佐竹潔)



© 佐竹潔・佐々木哲朗

ミナミオニヌマエビ

Atyoida pilipes

エビ目(十脚目)
ヌマエビ科

小笠原諸島

NT

環境省

NT

【形態・生態】

体長最大 4.5cm ほど。体色は青っぽいオリーブ色。額角は短く、上縁には歯がない。はさみ脚には長毛が密生し、濾過摂食に適している。小卵多産型で、幼生の生育には塩分濃度が必要。生活史は両側回遊型。

【分布の概要】

小笠原諸島; インド洋から西太平洋にかけての島しょに分布

【小笠原諸島における生息環境】

小笠原諸島では一部の河川の滝のようになった激流部にのみ生息しており、その生息適地は限られている。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ダムによる生息地の分断、河川改修による生息適地の消失など人為的な環境の改変を受けやすいと考えられる。降水量の減少などに伴う渇水も悪影響を及ぼすおそれがある。またエビ類は一般に薬剤に対する感受性が高いことから、農薬の流入には特に注意を払う必要がある。

【関連文献】

Cai, Y. et al., 2006; 林健一, 2007.

(執筆: 佐竹潔)



オガサワラヌマエビ

Paratya boninensis

エビ目(十脚目)
ヌマエビ科

小笠原諸島 **CR-EN**

環境省 **CR-EN**

【形態・生態】

体長最大 2.5cm ほど。本土や南西諸島に生息するヌマエビ属の種に比べて小型。額角上縁の歯数は 11 ~ 18。複眼の後方に眼上棘を有し、歩脚には外肢を有する。大卵少産型で、生活史は陸封型である。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

父島および母島の流量が安定した一部の河川の上流から中流に生息するが、個体数の減少傾向が近年認められ、かつて生息が確認されていた河川でも一部の地点で確認されていない。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ダムや河川改修など人為的な環境の改変、降水量の減少などに伴う渇水、外来種による捕食など、さまざまな要因が脅威となりうる。また、本種の薬剤に対する感受性は不明だが、同属のヌカエビは感受性が特に高いことが報告されていることから、農薬の流入が本種の生息に悪影響を及ぼすおそれもある。

【関連文献】

Satake, K. & Y. Cai, 2005; 林健一, 2007.

(執筆: 佐竹潔)



ヤシガニ

Birgus latro

エビ目(十脚目)
オカヤドカリ科

小笠原諸島 **DD**

環境省 **VU**

【形態・生態】

体長最大 40cm。前方中央部の胃域と左右の鰓域が大きく膨らみ、甲の輪郭は三角形に近い。はさみ脚は強大、歩脚は頑丈である。腹部は丸く、背面は石灰化する。腹部は見かけ上、左右相称だが、左側だけに付属肢がある。初期幼生は海で育ち、変態後は陸上で生活する。若い個体は巻貝を利用するが、成長後は貝殻を利用せず、穴居し、産卵時を除き水に入らない。夜行性で主にヤシの実の胚乳やイチジクなどの果物を食べるが、葉や腐果、カメの卵、動物の死骸なども食べる。

【分布の概要】

小笠原諸島、南西諸島からインド西太平洋海域の熱帯・亜熱帯海域の島々に広く分布

【小笠原諸島における生息環境】

ヤシ類やアダンなどが生育する海岸に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海岸の自然林の減少が脅威となる。また、食用として捕獲されることも減少要因である。

【関連文献】

三宅貞祥, 1982; 武田正倫, 1983; 佐々木哲朗・堀越和夫, 2008.

(執筆: 武田正倫)



オカヤドカリ

Coenobita cavipes

エビ目(十脚目)
オカヤドカリ科

小笠原諸島 *****

環境省

【形態・生態】

甲長 3cm ほど。甲、はさみ脚、歩脚とも地味な灰黄褐色であるが、個体により、あるいは体の部分により濃淡がある。第 1 触角柄が長く、第 1 節は幅広く側扁、第 2, 3 節は細い円筒形。鞭は鈍端に終わる。はさみ脚、歩脚とも細かい顆粒で覆われる。オスの第 5 脚の底節突起は短く、左右等長。海岸に近い陸上に生息し、昼よりも夜間に活動することが多い。

【分布の概要】

小笠原諸島、南西諸島からインド西太平洋海域の島しょに広く分布

【小笠原諸島における生息環境】

海岸付近に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

もともと個体数が少ない。初期幼生は海で育つが、変態後は陸上生活に移るため、海と陸が分断されないことが重要である。

【関連文献】

三宅貞祥, 1982; 東京都教育委員会, 1987; 沖縄県教育委員会, 1987.

(執筆: 武田正倫)



サキシマオカヤドカリ

Coenobita perlatus

エビ目(十脚目)
オカヤドカリ科

小笠原諸島



環境省



【形態・生態】

甲長最大 5cm。甲、はさみ脚、歩脚とも赤褐色で、はさみ脚と歩脚を覆う顆粒と関節部近くは淡色。左はさみ脚の掌部に顆粒列、第2歩脚の指節下面に縦走隆起がある。左右のはさみ脚の掌部上縁近くに長毛が列生する。オスの第5脚の底節突起は右側が著しく長く、左側を向いて強く湾曲する。宿貝の中に貯蔵水を保っており、淡水よりも海水を好む。

【分布の概要】

小笠原諸島、南西諸島からインド西太平洋海域の島しょに広く分布

【小笠原諸島における生息環境】

海岸付近の陸上の隆起サンゴ礁などに生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

もともと個体数が少ない。初期幼生は海で育つが、変態後は陸上生活に移るため、海と陸が分断されないことが重要である。

【関連文献】

三宅貞祥, 1982; 倉田洋二, 1987.



(執筆: 武田正倫)

ムラサキオカヤドカリ

Coenobita purpureus

エビ目(十脚目)
オカヤドカリ科

小笠原諸島



環境省

【形態・生態】

甲長最大 2cm。甲、はさみ脚、歩脚とも地色は紫色で、関節部や歩脚の下側などは黄白色を帯びる。青色が強い個体も見られ、小型個体では黄白色部が広い。はさみ脚は左右とも滑らかで、無毛である。オスの第5脚にある底節突起は管状で、右側が長く、後方に湾曲している。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、南西諸島

【小笠原諸島における生息環境】

海岸付近の陸上に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

近年における増減は明らかではない。初期幼生は海で育つが、変態後は陸上生活に移るため、海と陸が分断されないことが重要である。

【関連文献】

沖縄県教育委員会, 1987; 東京都教育委員会, 1987; 沖縄県教育委員会, 1987.



(執筆: 武田正倫)

ナキオカヤドカリ

Coenobita rugosus

エビ目(十脚目)
オカヤドカリ科

小笠原諸島



環境省

【形態・生態】

甲長 1.5cm ほど。オカヤドカリによく似ているが、左はさみ脚掌部の外面上部に 6、7 個の大きな顆粒が並んでいることで区別される。左側歩脚の指節内側に長い稜があり、これで掌部の顆粒を擦って発音すると言われる。オスの第5脚にある底節突起は短く、右側がわずかに長い。海岸に近いアダン林に群生し、昼よりも夜間に活動することが多い。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、本州(紀伊半島以南); インド西太平洋海域の島しょに広く分布

【小笠原諸島における生息環境】

海岸に近い樹林などに生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

もともと個体数が少ない。初期幼生は海で育つが、変態後は陸上生活に移るため、海と陸が分断されないことが重要である。

【関連文献】

三宅貞祥, 1982; 東京都教育委員会, 1987; 沖縄県教育委員会, 1987.



(執筆: 武田正倫)

カクレイワガニ

Geograpsus grayi

エビ目(十脚目)
イワガニ科

小笠原諸島

DD

環境省

【形態・生態】

甲幅 3.5cm ほど。甲の輪郭は正方形に近い。甲面は扁平で、側縁から内方に向かって斜めの細線状隆起が走る。甲の前側縁は薄板状で、眼窩の後方に深い切れ込みがある。はさみ脚、歩脚とも頑丈で、特に長節の幅が広く、前縁は板状。はさみ脚の長節前縁は 7～9 歯に刻まれる。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、九州、南西諸島からインド西太平洋海域の島しょに広く分布

【小笠原諸島における生息環境】

海岸の草地、灌木林などに生息する。南硫黄島では標高 916m の頂上付近でも採集されている。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

もともと個体数が少ない。初期幼生は海で育つが、変態後は陸上生活に移るため、海と陸が分断されないことが重要である。

【関連文献】

酒井恒, 1976; 武田正倫, 1982; 三宅貞祥, 1983.

(執筆: 武田正倫)



オガサワラモクズガニ

Eriocheir ogasawaraensis

エビ目(十脚目)
モクズガニ科

小笠原諸島

VU

環境省

VU

【形態・生態】

甲幅 10cm 以上。北海道から九州に分布するモクズガニ *E. japonicus* によく似ているが、本種では甲の輪郭がやや横長で、甲の前側縁に第 4 歯がなく、オスのはさみ脚掌部の下縁部に軟毛がない。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

父島では東側の河川に生息するが、個体密度は低い。母島では大型個体は自然度の高い河川の源流域や上流域に限定される。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

もともと個体数が少ない。河口域に戻ったゾエア幼生が、メガロパ幼生から稚ガニになって河川を溯上する。河川の汚染、水量減少による河口閉塞、人工建造物による海と陸の分断などが問題になる。

【関連文献】

Komai, T. et al., 2006; 小林哲・佐竹潔, 2009.

(執筆: 武田正倫)



クロベンケイガニ

Chiromantes dehaani

エビ目(十脚目)
ベンケイガニ科

小笠原諸島

*

環境省

【形態・生態】

甲幅 5cm ほど。甲の輪郭はほぼ四角形で、体の厚みがある。甲域は明瞭。甲の前側縁には切れ込みがない。はさみ脚は強力で、顆粒に覆われている。歩脚は頑丈で、黒色剛毛が生えている。黒紫色であるが、はさみ脚掌部の先半分や関節部附近などが黄白色を帯びる。小笠原諸島では、大型個体が多いことが注目されている。

【分布の概要】

本州北部から朝鮮半島、台湾、中国(北部)

【小笠原諸島における生息環境】

淡水の影響が強い汽水域や淡水域周辺の湿った林地や草地などに穴を掘って生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

初期幼生は海で育つが、変態後は河口での生活に移るため、河口域の汚染を防ぐことが重要である。

【関連文献】

酒井恒, 1965, 1976; 三宅貞祥, 1983.

(執筆: 武田正倫)



ベニシオマネキ

Uca crassipes

エビ目(十脚目)
スナガニ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

【形態・生態】

甲幅 2.5cm。オスのどちらか片方のはさみ脚が強大。掌部は滑らかで、一様にピンク色ないし赤褐色。不動指の付け根に小さな楕円形のくぼみがある。甲は後方がやや狭まる四角形で、額部が幅広い。甲面の色彩と模様には変異があり、父島では灰緑色の地色に濃褐色の斑模様をもつ個体が多い。一般にマングローブ湿地のやや上部に生息する。

【分布の概要】

九州南部から西太平洋、南太平洋、インド洋の沿岸および島しょ

【小笠原諸島における生息環境】

父島の二見湾奥に注ぐ奥村川と清瀬川河口の干潟にのみ生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

泥の干潟に生息するが、父島の生息地は狭く、家庭排水や河川改修の影響を受けやすい。

【関連文献】

酒井 恒, 1976; 三宅貞祥, 1983.



© 尾園 暁

(執筆者: 武田正倫)

【種名・学名などの準拠文献】

和名は三宅 (1982, 1983)、学名は Ng *et al.* (2008) に準拠した。また、配列は評価者の判断に従った。

三宅貞祥, 1982. 原色日本大型甲殻類図鑑 (I). 保育社 . vii + 260 pp.

三宅貞祥, 1983. 原色日本大型甲殻類図鑑 (II). 保育社 . viii + 277 pp.

Ng, P.K.L., D. Guinot & P.J.F. Davie, 2008. Systema Brachyurorum: Part I. An annotated checklist of extant brachyuran crabs of the world. *Raffles Bulletin of Zoology, Supplement*, (17): 1-286.

【留意種とした理由】

和名	留意種とした理由
オカヤドカリ	オカヤドカリ類の生息調査は近年行われていないため、個体数の増減については判断できないが、オカヤドカリ類は天然記念物に指定されており、海から陸へと進出を始めた特異な生態をもつ。海と陸を隔てる人工構築物はオカヤドカリ類の移動分散の妨げになる可能性があり、留意が必要である。
ムラサキオカヤドカリ	
ナキオカヤドカリ	
クロベンケイガニ	本種が生息する河口域は、河口閉塞や水質汚染、人工構築物の影響を直接受けることから、本種は良好な環境の指標となる。 また、父島の八瀬川水系では、標高 60m 付近の淡水域まで大型個体が分布している。このような例は本土からは報告されておらず、小笠原諸島の個体群が特殊であると考えられる。

【関連文献】

Cai, Y., P. K. L. Ng, Shokita, S. & K., Satake, 2006. On the species of Japanese atyid shrimps (Decapoda: Caridea) described by William Stimpson (1860). *Journal of Crustacean Biology*, 26: 392-419.

林健一, 2007. 日本産エビ類の分類と生態II. コエビ下目 (1). 生物研究社 . 292 pp.

Kato, H. & M. Takeda, 1981. A new shrimp of the genus *Palaemon* (Crustacea, Decapoda) from the Ogasawara Islands. *Bulletin of National Science Museum Series A (Zoology)*, 7: 101-109.

小林哲・佐竹潔, 2009. 小笠原諸島父島の河川におけるオガサワラモズガニとカニ類の分布様式. 陸水学雑誌, 70: 209-224.

Komai, T., I. Yamasaki, S. Kobayashi, Yamamoto, T. & S., Watanabe, 2006. *Eriocheir ogasawaraensis* Komai, a new species of mitten crab (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Varunidae) from the Ogasawara Islands, Japan, with notes on the systematics of *Eriocheir* De Haan, 1835. *Zootaxa*, 1168: 1-20.

倉田洋二, 1987. オカヤドカリについての二、三の知見. In: 小笠原諸島オカヤドカリ生息状況調査報告, pp. 94-97. 東京都教育庁社会教育部文化課.

三宅貞祥, 1982. 原色日本大型甲殻類図鑑 (I). 保育社 . vii + 260 pp.

三宅貞祥, 1983. 原色日本大型甲殻類図鑑 (II). 保育社 . viii + 277 pp.

Nunomura, N. & K. Satake, 2006. A new species of the genus *Gnorimosphaeroma* (Crustacea, Isopoda) from Bonin Islands, southern Japan. *Bulletin of the Toyama Science Museum*, (29): 1-6.

布村昇, 2010. オガサワラコツブムシ. 改訂レッドリスト付属説明資料 その他 無脊椎動物 (クモ形類・甲殻類), p. 2. 環境省自然環境局野生生物課.

沖縄県教育委員会, 1987. あまみ オカヤドカリ生息実態調査報告. 沖縄県天然記念物調査シリーズ, 第 29 集 . 254 pp.

酒井恒, 1965. 相模湾産蟹類. xvi + 206 + 92 + 32 pp., 100 pls.

酒井恒, 1976. 日本産蟹類. 講談社. xxix + 773 pp. (英文), 461 pp. (和文), 16 pp. + 251 pls.

佐々木哲朗・堀越和夫, 2008. 南硫黄島の海洋生物. 小笠原研究, 33: 151-171.

Satake, K. & Y. Cai, 2005. *Paratya boninensis*, a new species of freshwater shrimp (Crustacea: Decapoda: Atyidae) from Ogasawara, Japan. *Proceedings of the Biological Society of Washington*, 118: 306-311.

佐竹潔・上野隆平, 2004. 小笠原の川のエビたち. 「東洋のガラパゴス 小笠原 — 固有生物の魅力とその危機 —」, pp. 63-65. 神奈川県立生命の星・地球博物館.

武田正倫, 1982. 南硫黄島の陸生カニ2種. 南硫黄島原生自然環境保全地域調査報告書, pp.379-382. 環境庁自然保護局.

武田正倫, 1983. ヤシガニ 陸上で生活する巨大なヤドカリ. ニュートン, 3(10): 118-125.

東京都教育委員会, 1987. 小笠原諸島オカヤドカリ生息状況調査報告. 東京都教育庁社会教育部文化課 . 98 pp.